

Title	序
Sub Title	Preface
Author	安東, 伸介(Ando, Shinsuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.58, (1990. 11) ,p.i- iii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学部文学科開設百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00580001--002

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

序

慶應義塾大学文学部に所属する藝文学会々員の寄稿論文より成る本巻は、義塾の大学部、すなわち今日の文学部、経済学部、法学部の前身たる文学科、理財科、法律科の三学科開設百周年を記念する論文集である。

一八五八年（安政五年）、福澤諭吉によって江戸鉄砲洲の奥平中屋敷に開かれた蘭学塾は、その後英学を中心とする洋学塾・慶應義塾として発展し、一八九〇年（明治二十三年）に、右の大学部三学科が設置されるに至った。当時の文学科は単一学科であり、これが、文学、哲学、史学の三学科に分化されたのは、その二十年後、一九一〇年（明治四十三年）のことであった。幹事石田新太郎は文学科の大刷新を首唱し、文学科創設当時に審美学を講じて義塾と浅からぬ関係にあった森鷗外にはかり、その推挽によって、永井荷風を文学科の教授として迎えた。鷗外は、当時京都帝国大学の教授であった上田敏と共に文学科の顧問となり、荷風は教壇に立つと同時に、新たに発刊される運びとなった『三田文学』の編集主任を兼ねることになった。今日の文学部文学科の基礎はこの時築かれたと言い得よう。その意味において、『藝文研究』の本巻は、文学部文学科の設置八十周年を記念する論集と言うことも出来ると思う。

第二次大戦後、一九五〇年（昭和二十五年）に至り、文学、言語学、美学関係の教員を主体として設立された学会が、わが藝文学会である。『藝文研究』はその翌年創刊された。当時の学会委員長、西脇順三郎教授は、次のような「創

刊の辞」を記しておられる。

「慶應義塾大学文学部関係の人達の文学、言語及び藝術方面の諸研究を紀要として、ここに『藝文研究』を創刊することになりました。この紀要は慶應義塾大学文学部藝文学会の學術機関誌で、年二回刊行の予定であります。年々新しい研究を発表して日本の学会のみならず、広く世界の学界にも貢献し得るように益々発展し将来永く栄え行くことを、創刊にあたり切に祈念するのであります。」

藝文学会は西脇先生について、佐藤朔、池田彌三郎、白井浩司、村松暎、若林眞の諸教授が委員長に就任され、学会の発展に大きな貢献を重ねて来られた。

些か個人的な思い出について語ることを許されるならば、私が学部二年の塾生として、はじめて聴いた藝文学会の研究発表は、一九五二年（昭和二十七年）十一月六日の、第三回研究発表会であった。当時未だ二十代後半の若々しい助手だった村松暎、鈴木孝夫、大浜甫三先生の発表を拝聴したことを、私は昨日のことのように鮮明に記憶している。当時の研究発表会は委員長の西脇先生をはじめ、折口信夫、久松潜一、佐藤信彦、森武之助、池田弥三郎、奥野信太郎、厨川文夫、岩崎良三、佐藤朔、白井浩司、相良守峯、大野俊一、守屋謙二、菅沼貞三といった諸先生が、会場の前席に並んで若い研究者の発表を熱心に聴いておられ、常に緊張した空気が張りつめていた。

私をはじめその研究発表を拝聴した三先生の内、村松先生はすでに先年定年退職され、それを記念する『藝文研究』のフェストシュリフトが刊行されたことは記憶に新しい。鈴木、大浜の両先生も相次いで定年退職されることになり、大浜先生のための『藝文研究』記念号が目下編集されているところである。

諸先生の築いて来られた学統を守り、藝文学会の充実、発展を期することは、われわれ後進の義務であると信ずる。慶應義塾大学部開設百年、文学部「文学科」設置八十年、そして藝文学会創設四十年というこの記念すべき時に当り、わが文学部における文学・言語研究の成果の一端を示す論文集を刊行し得ることは、われわれの大きな喜びである。

慶應義塾大学藝文学会委員長

安東伸介